

「日本近代文学概説」の授業評価

国語専修・青木亮人

1. 授業の概要

日本近代文学概説は、学校教育実践コース国語教育専修・総合人間形成課程国際理解教育コース日本アジア理解分野の他に、小学校及び中学・高等学校国語教員免許取得を目指す他専修学生が受講する選択科目である。主に二年次対象の前期開講科目である点、また複数の専修からの受講生という点を考慮すると、受講生は近代文学に関する予備知識をほぼ持たないと仮定し、内容は近代文学史の入門編という位置付けでまとめた。

授業展開としては時代順に作家や作品を紹介し、また各回ごとにテーマを設けた。具体的な展開及び発表者の対象作品は下記の通りである。

- 01：ガイダンス
- 02：正岡子規とパンク・ロックの共通点について
- 03：夏目漱石「坊っちゃん」を例に、松山と三津浜の今昔における差異を学ぶ
- 04：森鴎外の刀に関する描写と現代人の違いについて
- 05：島崎藤村と北原白秋の詩を参考に、詩を創作する
- 06：金子みすずの詩とポップ・グループ「さよならポニーテール」の歌詞の共通点について
- 07：泉鏡花の女性美と日本画の女性美、現在の女性美との違い
- 08：芥川龍之介
- 09：江戸川乱歩と東野圭吾を例に、探偵小説のキャラクター造型について
- 10：山口誓子のモダニズム俳句と同時代写真や映画との関連性、及びファイナルファンタジーVIIとの共通点
- 11：川端康成とストーカー、非人情の妖しい美
- 12：太宰治、「正義や友情」のパロディで戦時下の風潮を茶化する
- 13：戦後の詩や前衛短歌、俳句を「解釈」することの是非について
- 14：村上春樹はなぜビートルズよりビーチ・ボーイズを愛したのか
- 15：まとめ

一回目のガイダンスで受講生にコメントを求めたところ、「近代文学史」に対する知識やイメージ

としては、

- ①教科書や受験等で学ぶ以外に、過去の文学作品に親しむことはほぼない
- ②自分たちと縁遠い過去の話、あくまで「勉強」
- ③「歴史に残る文学者＝人類の模範となるべき偉人」というイメージが強い

等のコメントが多かったため、二回目以降の具体的な授業展開を下記のように行った。

- ・①を踏まえ、近代文学には多様な作家や作品が存在し、私たちの考える「文学」がごく一部であることに意識的になるため、教科書等ではほぼ触れられない作家情報や作品等を中心に紹介することにした
- ・②に対応するため、アイドルが文学作品を紹介する番組や文学者の特集番組等、また日本画や映画、アニメ、ポップ・ミュージック等を織りまぜることで、過去の文学に触れることが身近な問題や共感につながりうることを目標とした
- ・③を踏まえ、偉大な文学者が道徳的で人道的であるとは限らず、むしろ反道徳的であることが多いことを意識するため、川端康成等の作家も紹介することにした

二回目以降はこれらを軸に内容を構成し、各回ごとのテーマに従って授業を行った。

なお、成績評価は各回の発表・質疑応答・出席等により総合的に判断することとした。

2. 授業の目的・到達目標

シラバスに記載したのは下記の通りである。

【授業目的】

日本近代文学のルーツや特徴を知ること、現在の国語教育で「文学」と見なされているものがどのような特徴を持っているかを学ぶ。

【到達目標】

- ①日本近代文学の流れや特徴、その目指す方向性を把握することで、「文学＝国語」の理解を深めることができる。
- ②日本近代文学史について具体的なイメージを持ち、説明することができる。

上記の目的・目標を、先に述べた「授業概要」での授業展開の中で実感してもらうことを目指した。

3. 授業評価法

最終回に学生アンケートを行った。項目は下記の通りである。

1. 最も印象に残ったこと
2. 取り上げてほしかったこと
3. 映像、画像、音楽等を多く使った授業スタイルについて
4. 改善点・改善方法など
5. その他、全体の感想・コメントなど

4. 授業評価結果

各項目を概略すると下記の通りである。

「1.」について

- ・太宰治や江戸川乱歩など読んだことのある作家が、他にも面白い作品を書いていたことを授業テキストを通じて知ることができた
- ・文学者には虐げられた生活や自殺、苦悩、反倫理的な生活など、暗い生涯を送る作家が多いことが印象的だった
- ・泉鏡花と日本画の女性美が面白かった
- ・番組「乃木坂浪漫」を教室の大スクリーンで観たのが印象的だった

「2.」について

- ・各回ごとのテキストの内容や分析、評価等をもう少し取り上げて言及してほしかった
- ・現代作家もより多く取り上げてほしかった

「3.」について

- ・授業内容に変化を付ける点では良かった
- ・文学史を身近に感じた
- ・意外な組み合わせから浮かび上がる共通点が面白かった
- ・映像等を取り上げる時間が多い時は眠くなることもあった

「4.」について

- ・組み合わせに飛躍があったり、テキスト以上に扱う時間が長い時などは、その映像や画像をなぜ近代文学概説で取り上げているのか分からなくなるがあった
- ・アイドルが印象的すぎて、授業内容がかすんでしまうがあった
- ・文学作品やアニメ、音楽等を組み合わせる時、受講生は授業内容や目標等を忘れやすいため、その組み合わせの必要性や意義を何度も分かりやすく、噛み砕いて説明し続けた方がよいように感じた。
- ・映像を観たり、グループワーク等は関心を持つ

学生が多かったと思うが、教師が専門的な内容を説明する時間の長い時などには眠そうにしている学生が多かったと思うので、工夫した方がよいように感じた

「5.」について

- ・扱う対象が幅広く、面白かったが、学校教育現場で役に立つかどうかは疑問
- ・映像や画像と文学の組み合わせの試みは良いと思うが、作家の暗い人生を知って少し憂鬱になったり、また専門的な話は眠くなることもあった
- ・文学が映画や写真など他ジャンルとも深い関係にあることを知ったり、また昔の作品を現代のサブカルチャー等とつなげることで、過去の作品を身近なものとして感じる発想を知ることができた

5. まとめ

毎回のコメントやアンケート結果等を参考にすると、「授業の概要」で触れた①～③を踏まえての授業展開はほぼ目標を達成できたと感じられる。ただ、反省点も少なくない。ここでは二点上げる。

第一に、作家や文学作品、また映像や画像等、やや専門的なものが多かったため、学校教員志望の受講生にはやや縁遠い内容と感じられた点である。彼らの多くはごく平均的な趣味を有し、映画や写真、アニメや音楽等の現代文化やポップ・カルチャーにそれほど親しんでいるわけでないことに加え、多くは学校教員になるための一科目として本講義を受講しているため、教科書や学校教育以外の幅広い現代文化に触れる必要性を特に感じないという特徴がある。「授業の概要」の①～③を踏まえた授業展開を行ったのは良いとして、それがあまりに過ぎると教育学部としての授業の意義が薄れることにつながるため、次年度は受講生の求める授業内容に十分留意しつつ組み立てていきたい。

第二に、受講生の多くは一～三回生であり、現行カリキュラムでは文学作品読解の方法論や発想法等をほぼ知らない状態で受講することが多いため、授業内に専門的な分析や読解を示すのは良いとして、その前に十分な説明が必要であった点である。受講生にしてみれば、なぜそのような発想や説明が成り立つのか、必要なのかの前提がないため、教員の説明を唐突に感じるが多かった節がある。彼らはいくまで「国語」教員を志望する受講生であり、「文学研究」についてほぼ知らない状態で受講していることに留意した上で、より分かりやすい授業展開ができるよう心がけていきたい。